十二源氏袖鏡　三

特別
へ12
5091
3

源氏袖鏡第三

三 末つむ花

四 もみぢの賀

五 花のえん

六 あふひ

へ12
5091
3

<2001-069>

源氏

并 末摘花

源氏ハ夕かほの事わすれかたくおほしけるか面かけのこ忘れかたく思しめしくらしもわめくさかりけれハ折ふし宮か給ひに御めのと子に大輔乃命婦とてらうたけなる女ありけるハ古常陸乃宮のむすめにまうけ給ひしれむすめひとりありさびしくてそのうちに給ふ由申けりきんをうつくしくひき給ふと申せハ源氏こゝの後まて今ひとくさやうそあらん

このねんを琴詩酒の三の友といふなら
いさよひとくさは此ひめ君酒とのこねくら
うそうん也　八月十六日いさよひの月さし
出るほとにみやう婦をさそひ宿にはらちて
此姫君にきんをすゝめさせて源氏立きゝ
し給ふあはれなるをきゝかれは見ぬ顔し給
ひの中将うかゝひはるまてにおなしくかへしと方
まいりねへあやしくおもしろくかたにつけて
うちひかれて　頭中将
もろともに大内山は出つれと入るかたみせぬ

いさよひの月　返し　源氏
里わかぬかけをは見れと行月のいるさの山を
たれかたつぬるのち源氏はひめきみにたひ
まゐり給へさきたつて参りてかたりける源氏
いてそのひ君のおもてまにおけるそん物なれ
ひたといみねるまに此すゑつむ花とも名つき
まちのさうて給ひ思ひそくはひめ君の紅花
とよみ給ふ
く猿つきてもらひいよはさすもふてこれ
へ御まきそ行いおやすきとまらひさるさえよ

てハ侍てまいれぬやうに仕へたり源氏
いまぬまいらず侍るなと申しけるを聞し
こめ給ハなしかなりかくて其の夜より
あひそめまつりあやしくかへぬ限あわり
こまやかにくやしとハ思ふすさやいふらん
毎かるもかき奉り給ふせんとも源氏ハ
思ひ給へそされとも此姫君ハ人の申事を
聞き給ハ見えそてはくまつらんとハ思ひたり
後のあしたの御文もゆかしきあり源氏
夕まくれの空もまたきぬまいらぬ

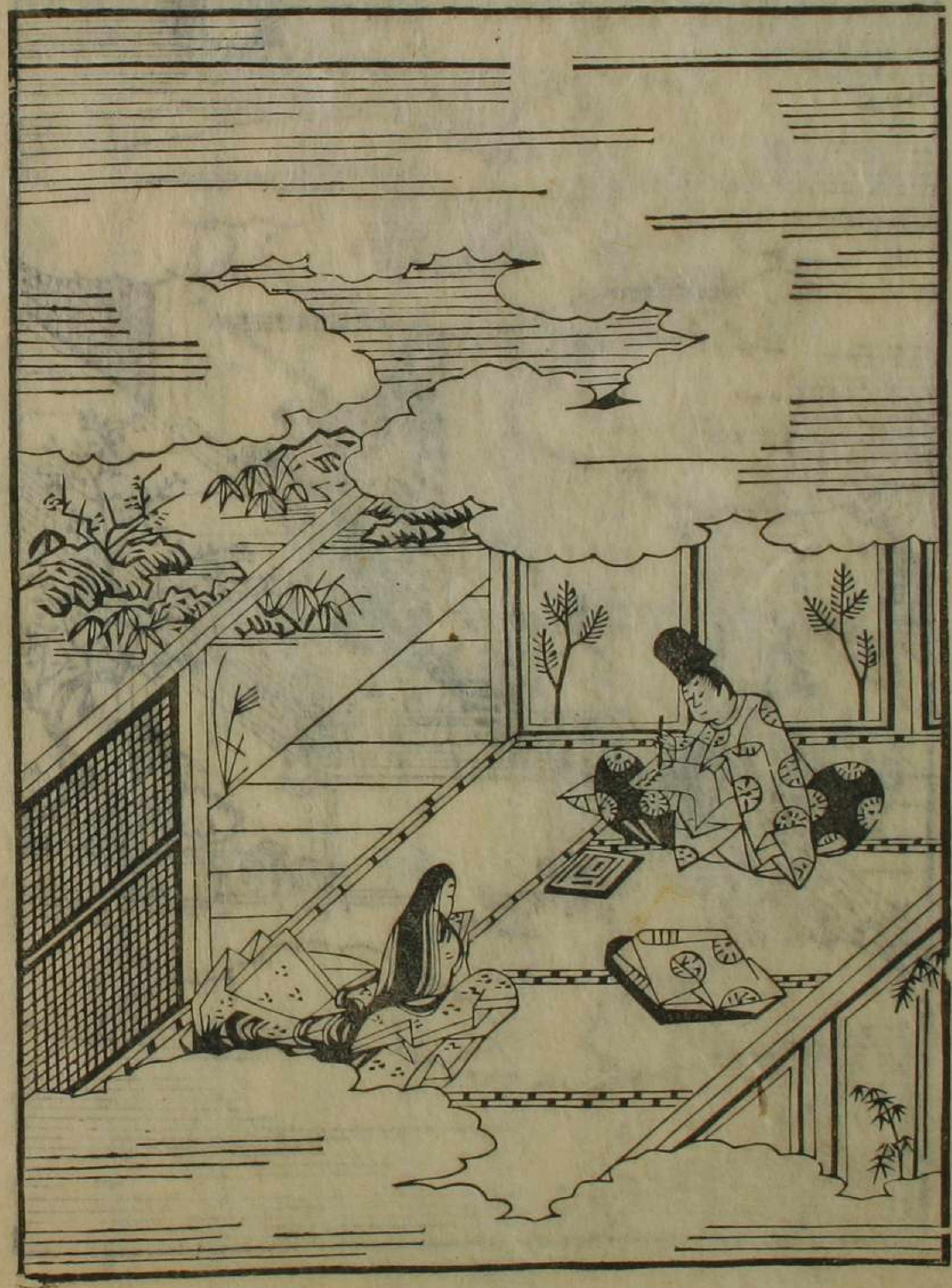
せきあかつらひの毎つれ給ひしまつる
これぬ夜乃月も同じ里をさしやり給ひ
心よなりあせなとも見る頭しそてまつる事
もやと雪かけりつもる見るらかあしきもらし給を
くしてもうくとぬるとあけぬる程もなき雑
とすらしやくもゆる也小見えきてのこまかにて
ゆきかけ出給つるとぬらやうにそて見るめたりみ
給へるも同ゆあけたく侍せなう小見えしるかか
このうかなといいそうつらうまさ小ふけるかまり
てらゆ給ひハ宮も同りくあくさまて白し

何かゝることゆる物ハそれなる里かへりよの外
またなくのひろうてさひしきまゝにて庭を付
おもふやうなあらし女きんかさつのゆかり物や
こゆるをすゑておなくこつれんとくやしさ
き物はさうき給ふ物をさへいひさらハ物
いひさえ人をきもうへにかゝるのかとこその
かゝりときむつかりしへあるにしやうれく
されとこハくしく君は源氏
御目さへ朝のうひハけなうたまえてつ
らのむきそ御ん松の雪のこあてうけ

なるにそれの木うつもれたる随身
めしてはらはせ給ふうらやみかほに松の木のを
のれとおきかへりてさとこほるゝも名にたて
末のとこそ門あけさするおきなのさむけにく
はしたなるおほきさのをんなかこたえをあや
しき物に入て袖くゝみにもたせたりみ給
て源氏
御ふりにけるかしらの雪をみる人もをとら
すぬらすあさの袖かなくてしもそれゆゑ
正月一日乃源氏の御しやうそくをみるへし

けふもすてゝけふもあまの落末つむ
からころもきみかこゝろのつらけれはたもとは
かくそそほちつゝのミ源氏はいとゝ心つきなし
とおほして此御文のはしに手ならひのやうに源
なつかしき色ともなしに何にこのすゑ
つむ花を袖にふれけん中にかきすさひ
たまひてこれをやう〳〵
きれはしのひとつゝ衣うすくとゝひす
なきを見せては此御返しは文の奥にそへ
け給ふ源氏

あかね夜をつくつ中に衣手にかき給ふく
いくんもしみしや又の日紫のひめ君乃御
かたへまいりの御たきなと給ふとてかきなふ
たまひを絵にかきて是れは絵ふをつけ給
へり又源氏の御かたに御てほんをかくこと給
へとよみ給ふた見ん所きふさしたてまつ
おちるとのつまへも紫のうへさまやまいつらんと
おやうけよせひくよりてのこひそまつり給
御ハ源氏御ハちうりやうふ多とかうへ手習
はつらんハあへちんとたちふれ給ふ 平仲かそもあきとあるハ



平仲なみたなくらしをこせんとて子ハあかのあ
のみをつかミわかしを女その水ニすミをすりそて入
ぬ平仲ハいもよらて其いのやうニつかミわりさとえ
てかほにこそぬせて　われにこそつらさハ君をこそみすれとも
人にすミつくかほの　末つむ花乃はなのうへ
けしきよとよミしとせ
いはれてさく花にて名つけられけり源氏

くれなゐの花そあやなくうとまるゝう
めのたちえハなつかしけれとかやうの前ともゆ
へあるをも女君をもすゑつむ花と名付らり

四　紅葉の賀

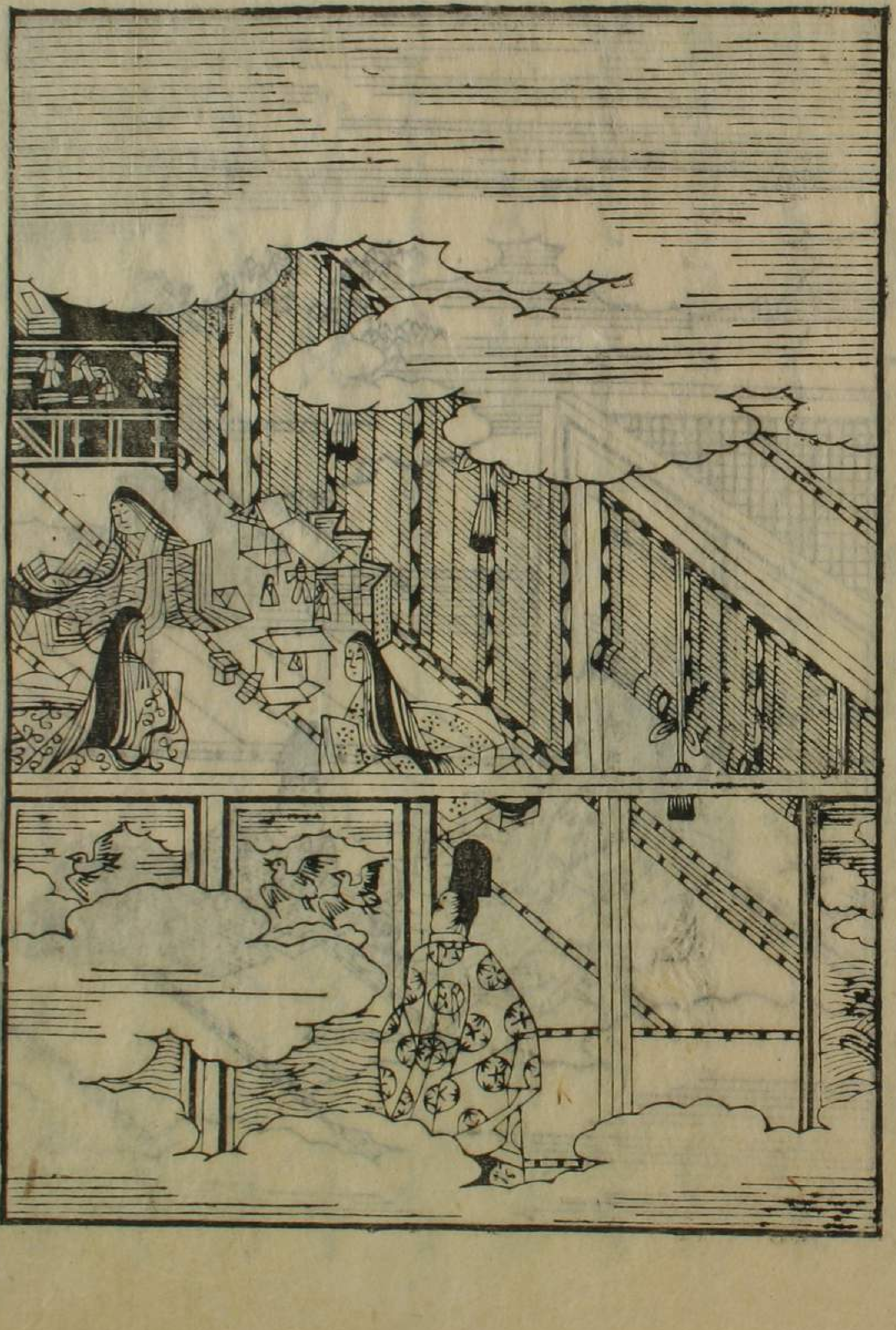
神無月もなかはの太上天皇五十にならせ給ふ
年なれハその御賀朱雀院にてありしを
もみちのさかりハもみちの賀といへり四十
より九十まて十年ことにするをいふ
いのりとなり蔵つかの袍刀なかふましきを
此日こそかりとすく松めされく内裏にて
試楽あり源氏の中将青海波をまひ給
せいかいはとハあをうミの波のをとにかよふゆへ
のくれなゐし源氏乃舞よのつねにまひおもし

あこおもちもみをはつかのはいえなり
ぬかきしきもたらんるましき人なるを
打しまふ法ハあまりゆくしく思ほされて
はいのかたときせかい此の中ねまれ
のるてなりこれもきよけるれとも源氏の
立なしひてハ花のるかれこやまま本
とこ出まいきて袖うちふしまてまち
ふかうかくのちとちれやうふはつかの句ひ
おもあやにこ出此舞よいかあやといふ事
ありまいをつかときうなりまいのまあち

事さて源氏より藤つほへ
物おもふにたちまふへくもあらぬ身の袖うち
ふりし心しりきや めもあやなりしかハ
ちかき頃を見なれ給ハねにや藤つほハ
から人の袖ふることハとをけれとたちゐに
つけてあはれとハみき 青海波ハ唐のまひ
也よりて御賀の日ハ志あんしや詠そ
いろくの舞とも松風にひゝきあひて波と
のみ山おろしとききまかう紅葉みちみち
うけよ四十人のかいしろれあきまてたる袖の

殊にいみしうも源氏のはかなしみえまみちぬり
たまひて御かとの御なかをなされて二の宮は
左大将御まへ乃きく拝してはかなしに
はしく中にせ内裏に源内侍のまけとて
年五十七八の女房あり色このみたく公
きせありて何くにおほしたくはなきなかきと
しういろめいたる心さまにておもはぬ人あ
ゑを源氏たはふれにいひかけ給ふにけ
なきとくも世にうちさけすりけなき
とはにあ　ある時御ゆのはてつかたにこの
なるすせ

内侍ますつかりおりしもしかるをくるかちは
なやかに御まへは源氏宰のまそ拝阿ゆし
給ふにこてうちそのえなきしきしに海を
さしかゝりて見え入りてかたち源氏もち給ふ
あつきに御しかなて見給へは目なのかさ拝
めかくしてそのよりていてめりよしあ
くしきよ也
まうてあつきのかさまかのさゝ草
おひめ御まへはこよ羽なり大あらきの森
の下草おひめまへは二海もすきめそる人も
なし　もさかめぬは
くるなり　内侍



思しこえ多かれ給の御よりかうらんさら
色ろ下ならずわたりも此程し源氏
帰りまけハ人やとらめむ所とあく御ゑみ
くめりも年代本くれちしくらとうくまか
源引寄 濃乃あのふりれ橋のちしくら
まかめられかうすりかれ活りといみうち
きちそく此さうしよ上のそきて此縁し
て源氏のよめハうえたわとまてかせさまふ
けとんくさんの外たちつとらふとまいの
とうの中将きくていまうさひよりぬ事なと

ほとゝきていひよせけれとおいらへて
もろやうのよ緑又あかりてのちくれ云
あそせくさにきんとおまふ琴みうつひあ
男そてかくれんをもやうのすきこゝをも
たちをそれをいかにみきこゆる人たちゆふ
まちしてなこのすゝしきよひの夜まれは
けたかし琵琶をおもしろくひきてうち
はそりまたわやこれをしとうふ山ちろの
こ殿のわたりのうへつくわとふみゐる法成さ
あつまやといふさいはらをうそふきて立より

給へり内侍ハいとゞうらみられける宰相ハ
にくからずそてきませとおもへるも源の
の人またたひて若き内侍
一 をりめづらし人しもありしにつまやかう
そもさ源あそびきられ源氏
人ハまだハおなかつらしにつまやのまやの
あまりもたまたまとくべきふこよひいけつまよ
うちまゐり給ぬ夜の中将うち見つけていと
うれしくうちおもすこし源氏をおどろかさ
てまつらんとおもひてねいりたるを待てある

あやしくおぼれも源氏ハ屏風のうしろへ入
もかゝる事中将とおもひて内侍を
ひきてなまやうのうしろに立られ給中将
さおもしろく給ひしてなやましくとかく
とたゝみよせて太刀をひきぬきたり女も
ものあわてしくいふきまよあか君〳〵と
手をすりあはせけれハ源氏ハ此中将たゝのや
ひんなき給ておこゝ御くるゝぬ心ちぬき
まけいふ給ひへてうつゝまへり中将に
こゝろひくまうひぬ源氏たゞしきんとし給

と中将涙をうかべてゆきしきこしもて涙かな
とて中将のおもひとられくさやうそくもねか
せんさしまふよからうひハはかくとた也道ハ
みの中しやう
なくむめのなやまわそんなきかりしかく
おぼろのみ中乃衣よう花源氏
かられなき袖をあらくたれ衣きぬをと
うき世んそうもたるひようしやまうすきすら
あふなきなきれておはねるさふにるらん
て又人よもまそれとのさまふ文のあしき内侍

のりまわおちとまりけるおもひすて涙ぐみく
源氏の御まへ参りてまつる内侍
うらみてもいふかひそなきたちかへる〇はる
てくやしき涙のふかりよおもわれのあさ海や也
まくけまときすふ御返し源氏
おもうちし波よ心をさかれとよせん
いそ枝いふうらミね中将の詩よわ源氏の御
たる袖をうてまつり文の御返しまゝけおもひと
えさし海しかてお得しまり也おもひ花田いろ
なれハその色代よにつきそて中将の方へ源氏

中たしハかしこやおもてあやうきたち時
のおもひハぞなりてこふこそ中ね
君よくひきとられめるおもひたしれかくて
あまんめる中とかこらん石川と云催馬楽に
石川のこまうとにおもひをとられてかきめ哉
ころいふ事ハ色の花田のおもひの中ハさしたるを
うらふさしけんをよめり哉つかけ集に交
とうみ給へりこれハ海とは源氏の御子な
建ても法門ハ菱まも志め給ひてかへつき
給ほに冷泉院と申まいらせし源氏

いつき海によむしむまつちまわりて此世
ふかる中の人まそう御心ありの女房御返し
たてまつる王命婦
見ても思ふ見ぬはたいかになけくらんこ
や世の人のまとふてふやみ　いまのわか宮をみん
給ひくゝちつとへおんし
よそへつゝ見るにこゝろハなくさまて露けさ
まさるなてしこの花　藤つほ
袖ぬるゝ露乃ゆかりと思ふにもなほ
こまれぬやまとなてしこ　こうきてんの女御

とりて此書に哥つかはされにうちたまふ
秋中宮と申侍りけるしの御ときにまふえそ
きんし

一 ほさもせぬところのやうに御ふかなぬ
よ人をこゝろにつけくもりて此所にかとかし
くたり給ひし源氏よりしくれなひくなんそ
まつりわきたるけるを哥つかはしくらしくかゝ
せとみひたる人なきなめりし

五 花乃宴

きさら紀廿日あまりに清門南殿の櫻宴
えんをさせ給ふときさき紀春宮のうつわ
ひらりみきりして佛うの事給日いとよく
されて定れ事きる乃しあも也紀よけ也
みこうちかんさちめられ君いとさうりて文
川うり給よ源氏の君春とふりし給宿
とのたまふ誰しあさ人よすれあり此心の
うちふ哥つか
大なるよ花のきとる紙みましく露も

に乃あたれきしやハ斎宮もうち続つくりけり
まれうちひまをさへつるといふをきゝてありしか
しまうたてく源氏の御つあるさりをわすれ
なくさめのひうらひ給ふかたのかへさき戸口も
ゆしてはれなとゝ六王前坊の戸くちしまうを河
らしふころきてんの御かたよちかたあまたふ
三乃戸をあきてあけやかての御かたにてうち
ひまに大将くの御廊戸あきたりかきた女
のしほ乃なくさめかおもひろ月よ夜にて
ゆかれきとおもさいてこなたさ海へおかさい

川ハとう伊しくてやゝ袖をとらへて源氏
春の紀夜のおもしれをなるも八月のおぼろ
けなる夜なりけれバ女いと思ひかけずあさ
ましくてこハぬすとの給まへバこれ人をよふ
されなるあなたりと乃みふしさと源氏ときて
てもうし心も何かわぬよりさき宮しきりにけ
らうたしその夜ハうつらひあかし給ひてすく
明ゆきにハんおりもしくてまみわしきへいそ
かゝる御様そてまたんとの給へとも女
うき身世にやかてきえなば名をけく

草のはらをバとはじとや思ふ 源氏

一 いづれぞと露のやどりをわかむまに小ざゝ

がはらに風もこそふけ あふぎをとりかはしてわ

かれまさるにも此のころけあふぎされ

たもとよりつゝしる月なれバ此女君をそ

らをまつける心ちする 源氏

一 よにしらぬ心ちこそすれ有明の月のゆく

ゑを空にまがへて といふかへりなんとわれ

おもて これハ右大臣家の六乃君なりきさい

女御にまいらせんとかしづく人なりけり やよひの

ころ右のおほいとのに藤の花のえんありて源

氏の君をまねかせ給ふ 右大臣

わがやどの花しなべての色ならバなにかは

さらに君をまたまし わたり給ひて酔なく

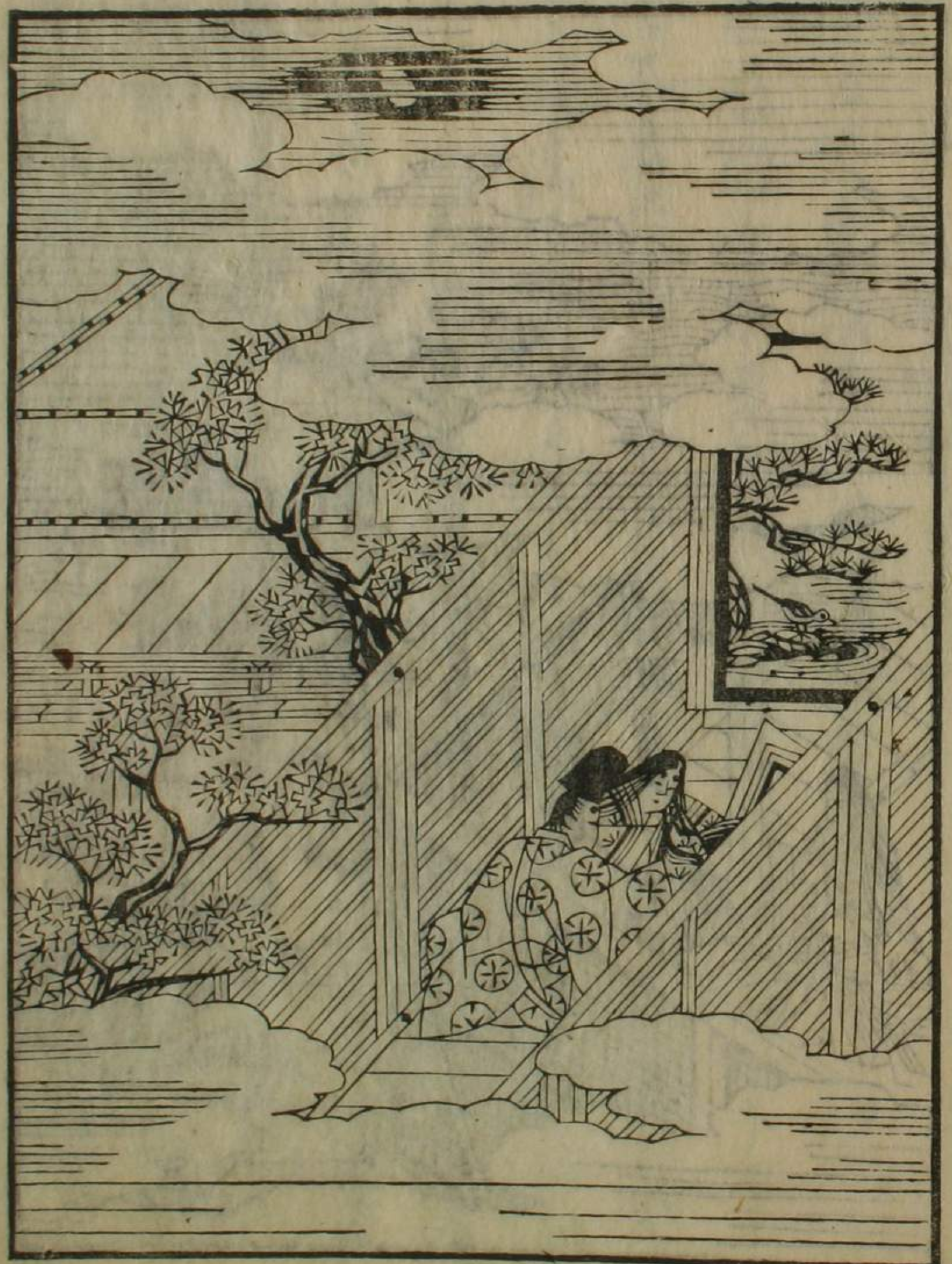
さうじのほどにてさうじをひきてこの人の袖

をとらへんとのみぞおぼさるゝ 源氏

あづさ弓いるさの山にまどふかなほのみし

月の影やみゆると なをあてよの御かへし

のきぬなるべし 女



なかめする夜をはいみたる月なき空
に海よいましやいとふらん雲をれたりて
猶しましはかる

六 あふひ

太上天皇にならせ給春宮にゆづり給こう
き殿の女御腹の御子位に立給ぬ此ゝにし
て太后乃宮と申す藤つぼのまゝ宮よ
きちや給それはうしろみ源氏にまかせつけ
中将ふ大将になり給ふ六条のみやす所の
ひめ君前坊乃御むすめ斎宮にて伊勢の
斎宮に定まり給ふ又賀茂のいつきには
源氏のおとゝ女三乃宮立給ひぬそのころほ
てあそびにはかものまつり見物ありみ

あふひの日　みあれの日といふまつりさいれの日といふなり　のことまつりの日と云もおなし日なり次の日を
まつり　とよ　斎院の御ともつかうまつり給へらんとてあ
殿上人やうやうくるまとそのへまゐりとか
わきたちせんしにて源氏の大将もつかうま
つり給源氏をみんとてまつんとあまたかゝりてよ
里物見車ところしも所ものさし見えよも
きよらに給くもえぬるり人もことき國く
よりまをわたくのおもふ一条の
おかちいかにもなくむしつたへきさまたり
大とののとのめ君も車にもをすくみてやまう

あふひの上なり　かの源氏の御ひくめかたひめの六条
のみやすん所も物見に御給つおそのくるま海
あまたのさとおほとの姫君の御車をやり
はらひてみやすん所乃車をとい人たまひの車
へをしへくなし人もなちもなけおかひけるま
すく人もなくこゝろやを所をかるやまぬを
されとむかれぬところちもおしくおもせとう
かくいれてきやうもあらしさすかに車たかぬ
とふひも源氏の御おゝもむれまするくるように
しやさくの御たにあ物見まや御行なく

さきふはつけくもこやまと所ハはんのこうく
御し引かへさうのく後ひ乃くまハ川に弱とめて
たらしおらへけをゝふらんおそろこられてこ
やまと所

影をのみみたらし河のつれなさよ身れ
うきほとそいとしらるゝ御し時乃こやま所の
れいさ御そうちたちまち此物の字とたゝりく
大とのゝむかえをいたはろしめふ事ありて
のちは御車あらそひのうらみを源氏に申人
ありこやまと所ハ御せちをつらしくおもひて
おそろしとおもひて御修法くいふかひなし
給はんとおぼして又乃日賀茂のみあれ見給はんとて
まへにひきゝて大将紫の上と御車にの給
て物見に出給ふむしきのはしのはしを
源氏にはつくしうたまき給く源氏
ちかくあきちいろのそこれかき乃お
ひかふ給ふ哥のこそさん　紫上
　そいろもいつくか志らん河こめすくみち
むらしかのこゑけうきぬようちつゝて常かへて
車のまされあけ給ともあひのりさ

人あまたみんとてとほくも人くおりしよ
ある女車にのる人をものきよせく源氏のは
くるまこにそてをさしいれてかいたり
まつれ物まんとおほしめしくひきよせて立
まつるにあふきのはかはりて源内侍
ちゐかりや人のかさせるあつひゆへ神の
ほたるのひかりをもちけるは蛍おりしてき
そかの源内侍のたけたかかり婦かうく
いろめくれとみておりして源氏
かさしけるくるまにおほゆるやさう

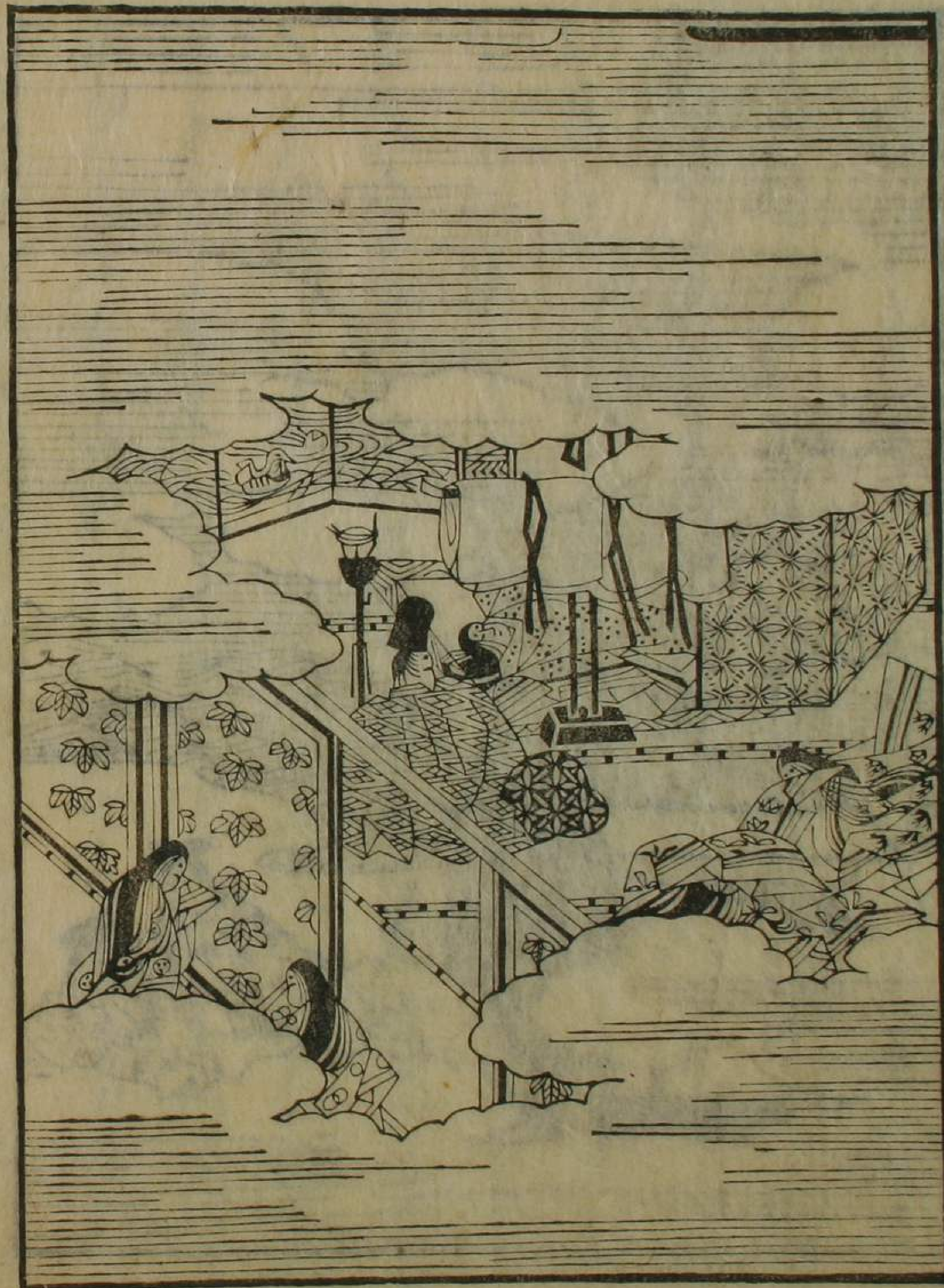
ち人はまつくあかいをとうめしくさひきちらえ
て又源ふかりし
くやしくも兄まつけるふ名のこうしく
人たのめたる草紙ふつわをいて侍しかるね
がきしあるいさまとおほえてありこれた
むしきさのうへをのりあい給をいてありし侍
さいくうやうにいゝるたるへしけふもゆへは
ほそとあつひとてつくとやも取にいとく描紙
おめいこれのひくゆむそめれ斎文よくし
て伊勢へくまんすと思ひ立給あるこい

のまゝに浄心もうかれて御身もさてされ
またしみのありたとのゝひめ君地の宮に
まゐらせ給へも山乃さすがにそれの御所
清をおこさせ給へとやまとの御前にお
出へけるかひも志泣のきかりける志うちなら
おなかうやみゆすていうやさにかんとうて
かれとやす一同ハ拍にそ引合 御拍子
いうやしらるんかゆる外なる地ハんかりなら
源氏ハこゝ心へ深しくて宮まての清うこれ
り海さんとゝ留氏めのうちしも大とのゝ御め

君ハてかやに給へも見まいらせて御すて計
蓋つらまころやまと一同へありこまけましお
おもて清瀬まに流悬ゐ
袖ぬらしさいちとりハ志かなうおり
まり大さこのころりそうき清さんハちうし
く拍りめそふにたらまその宮しきみて
なやこ給く浄かつら源氏とよひよせく
よみのまふひめ君
なけきまゐらにこるてつらむとせ
まいらてめよふさこ入のつまうたうよ地乃宮

あはれてもとうしけりとも志るまかめきハ
かきおこされて猶すくまり来むもれゆかり
夕きりの大将これハ　けかとしきはらつる人らさうしん
おちかて山のさすたたされの信ともあはれ
をしのこひく御そてよりこきはちうしまて
まいのことくれむ○せきあけて女君さし
入まひぬはまさなくれ給へもあかいのうへ
とうたゝ文はさく御そく大こやのなさけき
世くふもすかり八月廿日あまりのあり
つきはおきあ後る源氏いみしくおもし海

きさい宮のとがめられて源氏
のわかれ給ひけりハそれとまてもなく
てやら井乃あはれなるをふもめくれた
てまつりもひそかのはやうぞくやまれさせて御ふみは
女君ハふかくそめ給ひしとおぼしてもあはれさ
源氏
かぎりあれハうすずみ衣あさけれと涙
そ袖をふちとなしけるさしもあはれやゝ
川寺 時しもあれ秋やハ人のわかるへきさら
ハ秋さむきまなあるこゝろもなしかねれひとら



猿になしても給てなかきよにまよひの
くしたる文ときゝぬ寂しきたとへる枝は
仲くゆへそきそいはなりみやもあはれの
内らつへの法文なり　きはきたとへらとん つたとつかまなり　文を
こゝろ
　人の世はあはれときゝも露けきにを
らる神をおもひしらやまつれなの内をみつい
やと心うけまと源氏
　こまかなりもきゝしもおもひし春此世に
ものとくらん猿らもとりのきゝらなふくれらなり

られなれの中ねまいらすへしれるまは法
いかく中きやう
　西となれ志て厭ひうたかひきやをへ
ものうたにまきてなかあん源氏
　見し人の面となれにけりやとおもひてく
時面にうきくうもて法もまれまつてまゐかの
またんかのき法なとみかと見給もなみ悪し
のとあるりうき　むかしいふくるとのこりふ
ふるを八何にさの心此世は厭ましる名つ
まれせんさいの中たらなそしこそおもて

大こやのはるへ源氏
春くれ乃海きにのうちまくしこ紙
まゝて秋のうみとそこ承太こやハすて風
まつけくふ來れたらわかりかきはなうまし
てらわあへ帰りて太夫
いまも見く申し神をとるすゝかき
はあまにしやまぬしたそしさたり給いとれ
つまされも船ゐのみ女ゟみのあされハお目
しあるんやとて源氏
かきてこのくれしう袖ハあけまれ御ふ

秋ハあまさへあまと船ゟか乃ひめ君
嫁きわふさらとされぬときてしよち
志ら三宮をいつとそ女ふは四十九日すき
あまハうちへも玉文へもまいんとておもら
のふ行とくこなさ子ゆて見をとり来り
給は袖もひきされぬ法さ海いとゝすし
おまつるはみちやうのあさりふすまさらわ
ちらして法よなしいもそさいさら紙たらく
めとくし志ゆて三まふかしこのはるやと
そくとあふきてたまき給よう人よみなさん

かはきたるへし　ゆかき枕かはきあす
夜られとこまよかせんとハ忘んまうかえらを
さ御しうしてその花とのしかすき衾
古き枕ふるれうもふかせんと云　長恨歌
のゝや　源氏
なき玉そいとゝかなしきねし床のあく
かれかたき心ならひに　同
君なくてちりつもりぬるとこなつの露
うちはらひいく夜ねぬらんかくてうちは夜
なかましへたてけれともくめつしりや中宮ハ

まきれつゝれやつまきさるいとゝ夜めしく
みてれ（脈のさきふりの念いをまくするを）くて二条の院へお
りて一夜ハとゝふにれ夜こもりて文の
日むらさきのひめ君と碁うち忘んふき
なとしてあそひなれ紫さかに語ひと
このみかえて（云爰りちかさかりとハ語ひはまさると云たるをかく語ひ人と云）
十月いゐのよかね源氏ハむらさきの姫君
に新枕しなりね給のれ文も人乃かんと
かめぬ御中なれとすまをかまにひき語ひ
てなれたり　源氏

あやなくもへだてける哉夜をかさねさす
がになれし中の衣をとあそばしける心のあり
ければ人を何しようたなくたのもしき人と
姫君はくやしく思し給ふ又乃衣はいのこ
のもちいまいらせける故に源氏みな
こまやかへこれみつをめしくはしくもちいの数
かさねあつておもての衣さかまいらせよしと
思ひいまくしき日なりとの給ふこれみつ
衣をうけ給つて心きゝきも紬なれば心と
ゞひよかぬ何くも様のこいゝ三ツかまいて

へきと思ひかへり源氏三ツ日のよそあらん
かすさのゑまふ様のそのもちいとよそうよ物
事もあしたいいの子はあくる日なれいこまし
これはこれよれうなる事なれ源氏のこれ
かひとつと給ら返さううちより侍るの三ケの大
事の文一なり何くあかし衣ふきくかのもちいを
忍ひやたおそてまゐりて枕もとにまいらせく
きいたらひの由とあり四日のあさもちいの
入らかうこのさきみすさを海えそさせまうす
時まうけたるにとまゐらせ何くあれなとし

けなきも心よしとおもひきれかくてのちは
うち人もみ給てもしかりかくおもしろく契か
しけり新枕のかはす　わか草の新手枕を
まきそめてよをやへたてんにくからなくに
ひめ君はうとみきこえしありけれは御さて
とありとみつからすゝりわたものをなかし
そのきれはまゐらせて後そ海さわきけしもか
つらね正月一日まゐりのやうよ源氏は大殿
へわたり給つりれとやうくもひとものゝとくこ
そうけまか夢あれたるまゐと女の御衣そへ

まへ年　源氏
あまたとしけふあらためし色衣きて
はなみたそふる心ちする大宮や
あたらしき年ともいはすふる物は
ふりぬる人のなみた成けり